ああ青春の歓喜を

(大正十五年寮歌

我が行く方の遠ければ ああ青春の歓喜を の酔ひと言ふは誰れ

草を茵の旅枕 しばしこの舎に憩ひして

明日の旅路を夢に見んぁすの旅路を夢に見ん

曠野に崩ゆる若草の よりなさます。

几

そよ吹く風に寄するとき しらべゆかしき 喜びを

光の波は野に充てり うららかに照る春の日は の奥にまどろみて

> ただ野は広く路遠し 故郷の空は見えねども

光の雲を如何に見る 歩みつづくる行人は 彼方の国に孜々としてかなた 行手の空に湧き出づる

世は永劫に常闇か の光見えざれば

頑迷の徒も起き出でて 我等の群に加はらんタポ゚ 撓まぬ旅は 麗しく 我が清純の魂の

Ŧi.

夜ふけの街を歩みつつ あはれゆかしき人の世や

光まばゆき自治の燈 来るはここぞ森の奥また 友も歌へば我も和しとも、え 遠き北斗の星を呼び

牧野千代治君 木村左京君 作曲 作歌